葡萄の蔓

幸谷遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葡萄の蔓

【Ｎコード】
Ｎ１３６２Ｖ

【作者名】
幸谷遥

【あらすじ】
世界の片隅、とある地方都市での夏の日の出来事

庭の葡萄は充分に熟し、食べ頃だというのにその実に手を伸ばす者はない。空き家だからだ。畑に植えられたそれのように水と肥料を満足に与えられたわけではないのに、葡萄は美しく、光沢さえ放っているように見えた。昼間賑わしく囀る小鳥たちが啄むままにするには惜しく思えて、大人が背伸びすれば届く位置にあるそれを、通り過ぎるたび見上げたが、手をのばそうとはしなかった。届かないとわかっていたからだ。

その年の夏は、ひどくつまらない。一番仲のよい友人が祖母を亡くし、両親に葬式へ連れられていったきり帰ってこない。一枚の絵葉書が届いて、汚い字で同じように退屈している従姉妹と遊んで楽しいと書かれていてますますおもしろくなくなったり、母親が春に生まれた妹の世話に忙しいせいで、口喧しい大叔母のところへやられたりした。大叔母は子供が好きなのだが、子供の方がそうとは限らない。彼女の好きな子供というのは大人しくて彼女の言うことを素直にきく粗相をしない子供なのだ。そしてみんないい子だったという大叔母の子供たちはとかくいけすかない。同じく大叔母に預けられた彼らの子供たちですら、なにかにつけてやれ自分の学校はどうだの何を買ってもらっただの、自分が持っているものについて鼻にかけて話すのである。

その点において、小学校を卒業するのに三年余分にかかり小さな薬店を営む彼の父や、おさがりの玩具で遊んできた彼におもしろいことなどありはしなかった。唯一、彼の家で行われる知恵比べのチェスやカード遊びなどのゲームで彼らの鼻をあかしてやるのが楽しみといえたが、いつまでも勝ち続けられる道理もないのできらいじゃないという程度というのが正確なものだった。

彼は美しく実った葡萄の真下に立っていた。ちょうど日影だった。

そこであのさえない父親でもそれなりに尊敬できるのに、と思った。さんざんに馬鹿にされようとやり返してやろうという気持ちになるのは、そういうことだった。

　そのときちょうど向こうの路地からふっ、と黒い帽子をかぶった人影が出てきて少年に一瞥をくれると彼のいる方とは逆の方へ行くのを見た。それは彼より年かさの男の子だった。ひょろひょろと伸びた手足を揺らめかせて遠ざかっていく後姿をじっと見送った。その男の子はマーカイムといった。五つ年上の彼のことを少年は知っていたがきらいだった。彼も大叔母の家にいる連中とたいした違いはなかった。何かと皮肉めいた物言いをし、嘲笑をもらすいばり屋に好感を抱いたところですぐに裏切られるのが関の山だというのに、大人は彼のことが好きだし、何も知らない女の子は彼に憧れを抱いた。

　マーカイムに出くわした瞬間、なにもかも一度におもしろくなくなって今日は大叔母の家に行くまいと決めた。仮に家族に知れても彼が行きたがっていないことを知っているのでなんとも思わないだろうとまで考えた。

　坂をひとつ越えてマーカイムが出てきた路地に入った。あまりおもしろくないと思いながら進むと一風変わった場所に入り込んでいた。そこは区画整備が進まない古い地区だった。壊すのが惜しい装飾が施された家が、解体され再び組み立てられることをきらって佇んでいた。その様は美観というものから掛け離れ、凝り固まって見苦しく身動きがとれなくなった旧弊な考えそのもののように見えた。少年は実在の人物をうつした、朽ちることのない蝋人形の不自然さに似たものを感じた。

　あのマーカイムはこの辺に住んでいた。少年ははここに並ぶ家々がいくら立派でも住みたいなど思わなかった。埃っぽく黴くささえ漂わすそれは気に入るところではなかった。しかしマーカイムの方だってそんなところでずっと生まれ育ったので、いまさら少年が住む日当たりのいい小さな家に住みたいなど思ってはいないのは確か

だった。
通り掛かった黒い柵の鉄棒と庭木の枝葉越しに噴水の朽ちかけた白い彫像を見た。あれらを自分の家に飾りたがる気持ちを少年は想像できなかった。
道がくだり坂になったところで心持ち駆け足になりながら足早にそこを立ち去った。敷地の中から枝が放埒に通りへ伸びていたが、日差しを遮り、陰影によって濃淡の模様を地に描き出していた。

博物館はその建物のある通りごと忘れ去られたようにあった。街の人々から気にかけられることのないそこは、年若い職員がひとりだけいたが、彼は熱心な働き手ではなく何かにつけて留守にした。子供がそこに入るのに切符はいらなかった。そして、職員は不在でも、奥で何か仕事をしているかに見えるよう門扉に鍵をかけなかった。
埃を被った展示品にどれほどの価値があるのか知れなかったが、三億年前の甲虫やシダ植物の化石から少年が感じとるものは遥かに大きかった。それら時の遺物を頭の上に、部屋のすみにある展示台の下に潜り込んだ。廊下の窓硝子から昼間の白い日光が差し込んでいた。展示室の窓が光が入らないように壁と同じ色になっていたせいで、薄くともされた電球の明かりをそらぞらしく感じた。人工的に作られた影の中に少年はいた。じっとしていると体中からあらゆる感覚が押し寄せてきた。気温の暑さ、床の冷たさ、感触、髪の毛のなかにたまった汗、そして空腹を感じた。すべて普段から慣れ親しみすぎて、こんなときにしか感じられない感覚たちだった。それらはあまりにも膨大で、彼を飲み込むかのように襲ってきた。少年はじっとしていられなくなった。少しでも動いて気を紛らわせなければと、溜め息に似た深呼吸を一度、二度と繰り返した。
かすかな物音が耳についたのはそのときだった。よく耳を澄ますと足音であることがわかった。やがて部屋の扉が開いた。見つかりたくないと思って、身をいっそう小さくしたので、入ってきた人物

が誰であるのか見なかった。その人は、彼がいるところまでこなかった。

たくさんの標本を収めたケースの蓋が開いて、わずかの間のあと再び閉まる音がした。鍵を開ける気配はしなかった。鍵はかかっていなかったのだろう。

出て行く者の後ろ姿を垣間見た。マーカイムだった。彼の人の気配が遠ざかったのを見計らって、少年は隠れていた場所から抜け出した。そっと純粋な好奇心から、先ほど開かれ、閉じられた標本箱を覗き込んだ。標本箱に目を凝らす内にマーカイムが何をしたのかは察した。小さな巻き貝の化石がないことを残されたラベルが物語っていた。それを見ると少年は硝子の蓋を開けて糊付けされたラベルを剥いで服のポケットに押し込んだ。

標本箱の中は小さなものがたくさん収められていて、そのたった一つがなくなってもわかりそうになかったが、そのことを知る者にとってはわずかの空白が大きく思えた。ただちに少年は博物館を後にした。職員はまだいなかった。盗みをしたのは彼ではないのに後ろめたかった。歩みは早まり、ついには駆け足になった。

走れるのなら何処までも走っていきたかった。家の反対方向に、街の外へ。遂には飛行機が重力を振り切って飛び立つように空中を駆け上がれたら、と思った。思っただけだった。少年はまっすぐ家に向かった。途中でまだ家に帰るには早い時間であることを思い出して、叱られるのをなるべく遅くしようと走るのをやめて歩きだした。

葡萄が植わった空き家の側に来たとき、マーカイムがあの葡萄に手を伸ばしているのを見た。彼の手は一番下の実に手が届いた。彼がその実を口に含んだとき、近付いた少年を見た。

少し前から彼は少年のことに気付いていた。顔を見合わせて、無言ですれ違った。マーカイムは微笑を浮かべているように見えた。

夜が明けて次の日が来ても何も変わらなかった。博物館から標本が一つ紛失したことは、誰の口にものぼらない。やがて祖母を亡く

した友人が帰ってきて、さらに日が経とうとそれは起こっていない事のままだった。

一度、マーカイムがポケットの中で何かを玩んでいるのを見かけたとき少年は机の引き出しの奥にしまった、殆ど字が読めない白い紙のラベルのことを思い浮かべ、それからあの日の後ろめたさが甦った。

（後書き）

閉鎖したサイトで公開していたものです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1362v/

葡萄の蔓

2011年7月24日03時20分発行